

# 地域と歩む史料保存活動

## —越佐歴史資料調査会の活動を中心に—

新潟市歴史文化課 長谷川 伸

### 1. はじめに—地域史料の保存・活用と調査会活動の役割

近年の全国各地における歴史資料に関する調査会活動の隆盛には、目を見張るものがある。その先駆けをなした房総・甲州の史料調査会をはじめとして、天草・伊予など各地でそれぞれ独自のスタイルで活発な活動を展開している。また、阪神・淡路大震災後の史料ネットの運動は、新たなプロジェクトの始動で、次の段階を迎えている。

つまり、これらの調査会活動の方法論的な特質を整理してみると、

- ① 近年の史料管理学の進展に伴って普及した「現状記録法」の実践・適用
  - ② 被災史料の救済・保全活動から生まれた地域の市民参加型歴史学運動
- という2つの方向性を見出すことができる。

これらの活動は、ともに地域への視座を持って取り組んできたものであるといえる。しかし、その主体は外部の歴史研究者であり、史料の研究や利用のための調査に重きを置いたものであったため、史料の保存や本当の意味での地域への還元を考える際に、いかにして地域住民や所蔵者とともに史料の保存・活用を実践していくかという点で、課題を残している。

ところで、新潟県内では平成4（1992）年の県立文書館の開館以後、史料所在調査や出張くん蒸など、史料を現地で保存するための様々な事業が展開されてきた。しかし、その間に県立文書館ゆえの限界や課題が見えてきている。

例えば、県立文書館の史料所在調査の場合、県内112の全市町村をすべて回る予定にしているため、一度調査対象になった史料群は、次にいつ再び調査できるかわからない。また、ある特定の史料群に何年も掛り切りになることも、行政の平等性から許されないという事情があり、調査後の史料の動向については、些か不安な面もある。

こうした行政の隙間とも言うべき課題に対して、新潟県内では、文書館・自治体史編纂だけでは対応できない史料保存の在り方を模索し始めた。それは、各々の史料群と少しでも長く向き合うために、現地で史料が生き続けていくために、よりきめ細かい対応ができるように、行政の組織を離れて、個人・民間のレベルでの保存活動ができないだろうか。そして、こうした民間ベースの活動の輪が広がっていくことによって、本当の意味での「現地主義」に基づく保存活動の実践が可能になるのではないかという考え方が現われ、さらにこれを実践に移したいという動きに結びついていったのである。

つまり、文書館の活動では手の届かない部分に対して、調査会という形態をとって、地域に入り込んで密着しながら、積極的・主体的に活動を展開していく試み。さらに全国レベルの上記の2つの調査会活動の方法論を軸に、新潟で展開されてきた「現地保存主義」を一步進めて「現地主義」という姿勢を具現化しようとしたのが、「越佐歴史資料調査会」の活動である。

## 2. 越佐歴史資料調査会の活動

### (1) 調査会の設立と基本理念

このような背景を前提として、1997(平成9)年6月、「越佐歴史資料調査会」を結成した。以下は当会設立の趣意書の抜粋である。

① 戦後、とりわけ高度成長以降、都市化・過疎化等で地域社会が急速に変貌を遂げました。それと平行して、地域に残された歴史資料の散逸・流失・減失も進行してきたことは、これまでも度々指摘されてきたところです。

私たち越後・佐渡の歴史や文化に関心をもち、学び研究しようとする者にとって、先人の残したかけがえのない歴史資料を守り後世に伝えることは、緊急を要する責務であると思われまます。

② 新潟県内を対象とした歴史研究や学習は、これまで活発に実践されてきました。

しかし、近年やや個別分散的な傾向が生まれ、それぞれ個々の研究状況も次第に停滞化しつつある傾向も見受けられます。そこで、共同で史料調査を行うことを通して、幅広い参加者の自由で対等な交流、及び学習・研究の場が生まれ、同時に史料保存のネットワークが広がることを願っています。

③ 地域の人々と歴史学の関わりは、これまで必ずしも十分でなかったように思われます。そこで、市民参加の活動をめざし、より多くの人に歴史資料の保存・活用の重要性や、地域史への理解が深まるように、具体的な実践に取り組みたいと考えます。

④ 近年の文書館論や史料整理方法の進展に学び、なお史料の現地主義(現地保存・現地整理・現地利用)の原則もふまえて、現状を尊重した整理やフィールドワークの在り方を追及していきたいと思っています。

設立の趣旨を要約すると以下の4点に集約される。

- 1 地域の文化遺産である歴史資料の保存。
- 2 史料保存ネットワークの拡充。
- 3 地域住民参加の調査活動。
- 4 近年の史料整理法と現地主義(現地保

### 存・現地整理・現地利用)の原則

この中で特筆すべき当会の特徴は、3と4にあるといえる。すなわち、従来必ずしも十分でなかった地域の人々と歴史学の関わりを、ともに史料整理に携わるといふ調査会活動を通じて活性化しようという試みである。そして当会の基本的なスタンスは、史料というものは、それが存在した地域や所蔵者の許に存在してはじめて、歴史資料としての意味を発揮するという考えに立っている。史料整理は、所蔵者のため、地域のため、史料群を長く保存していくことを目的として行っている。それゆえ、調査会活動における史料の整理・保存・活用は、すべて現地で行うことにしている。ここには新潟方式ともいふべき「現地主義」の考え方が貫かれているのである。

次に、調査会の構成と活動方針を紹介しよう。会員制はとらずに、その都度調査参加者を募っている。運営は手弁当、自主・自立を基本としている。会の運営は世話人(現在は高校教員2、自治体史編さん2、大学1、博物館学芸員3の計8名で構成)を置き、活動の運営や会報の刊行等を分担している。調査先は県内市町村単位で選び、1市町村2～3年以内を原則とし、上越・中越・下越・佐渡をバランスよく回ることを原則としている。

### (2) 地域住民とともに歩む調査会活動

それでは、調査会の活動と調査方法を紹介していくことにする(大会ではスライドを用いて紹介した)。調査会の1年の活動サイクルは、(原則的に)調査先の決定から事前調査・現状記録を6・7月迄に行い、本調査を1回2泊3日、夏・冬、年2～3回程度の割合で開催する。現在は、8月(2泊3日)、11・2月(1泊2日)の3回となっている。そして目録を作成し、翌春5月に1年間の調査の成果を調査報告会という形で地元に戻している。

調査方法は、史料管理学、現状記録法に基づいた史料整理である。ただし、1年1史料群程度が限界であるため、整理のレベルは史料群の性格に応じて変えている。実際の手順は、①収

納筆筒のスケッチと採寸→②筆筒の引き出し毎に撮影とスケッチ、個々の資料の取り出し、ナンバリングと封筒詰め→③封筒詰めた史料毎に解説・目録取りという形で行った。整理方法は各地の調査会とあまり変わらないはずである。史料調査の対象は古文書のみではなく、許される限り総合的に調査する。史料整理は文書から文字情報だけを引き出すためだけに整理するのではなく、歴史的な史料すべてから最大の情報を引き出すことが目的である。そのため、史料調査の対象は古文書のみではなく、聞き取りをはじめ、文書筆筒から民具のモノ資料まで、許される限り総合的に調査することを心掛けている。この方針は、近年の史料管理学の方法論を一步進めた在り方としては、博物館関係者が多い当会の特徴であるともいえる。

史料整理は研究者のために行われるのではなく、所蔵者のため、地域のため、史料群を長く保存していくことを目的に行われるものである。とりわけ調査会で一番重要視しているのは、史料群を保存・管理する所蔵者である。このため調査会では、所蔵者と十分な打ち合わせを心がけ、史料群の保存と管理の便を最優先に考えている。

現在当会は、新潟県東頸城郡安塚町をフィールドとして、3年目の活動を行っている。1997年は山口家文書、1998年は山岸家文書と小日向家文書、そして本年は山岸家から新たに発見された屏風下張り文書の解体・整理を行っており、継続中である。

参加者は県内在住の歴史研究者が中心ではあるが、「興味はあるけれども、史料を読んだり扱うのは初心者で…」というような、地元安塚町の古文書学習会の皆さんや、近接する上越地方の文化財行政担当者・教員や郷土史に関心のある方なども含まれている。当初は人の集まりなど心配な点もあったが、地元の方を中心に参加いただき、こうした点でも当会の設立趣旨に沿った活動は可能になった。

調査では、③の作業を中心に地元の方々とともに和気藹々と資料を整理・解説したが、休憩時間にはお茶を飲みながら地元ならではの歴史

的な背景の話の伺うこともでき、大変有意義であった。そこで当会では、さらなる積極的な地元参加者との交流を目指して、夏の調査の際に「焼き肉と地酒の夕べ」という試みを行い、好評を得て継続している。

また調査報告会は、当会の活動を知ってもらうことと、史料保存や新たな史料の発見への啓発を期待して開催している。調査史料の整理過程や、調査によってわかった近世・近代の家や地域の歴史の一部をわかりやすく報告したり、実際の史料を前にして整理史料を展示・解説する。そして調査に参加して下さった地元の方からも、古文書との出会いと魅力や地元における史料保存の問題点ということでお話をいただいております、大変嬉しく思っている。

### 3. 「現地主義」と史料保存のネットワーク

#### (1) 地域で史料を保存・活用するための試み

このような「現地主義」の考え方に基づいた調査会活動を行っていくためには、既存の史料保存ネットワークとの協力関係が必要であり、調査会の活動を通じた信頼関係の構築が課題となる。そのため、当会では以下のような取り組みを行っている。

第一に当会が活動を行うにあたって注意を払ったのは、新潟県内の史料保存活動の中心である県立文書館との関係である。県立文書館には、いろいろな面で協力をいただいている。まず、文書箱などの備品援助である。そして、調査地の選定にあたっては、県立文書館の史料所在調査の成果を利用させていただいている。これは、一度所在調査で入った自治体や所蔵者の概要を掴むことができることと、文書館の所在調査の計画とのバッティングを避けることや、現在自治体史を編纂している自治体へは入らないようするための配慮である。そして文書館に対して当会では、史料調査終了後には作成した目録を供与し、文書館で活用して貰えるようにしている。このように当会と文書館とは、互いに自立した関係を保ちながらも、史料保存のための情報を共有しながら協力関係を推進している。

そして、調査会活動を展開する際にお世話に

なる地元市町村（安塚町教育委員会）との関係である。現在安塚町教育委員会からは、調査の際の作業場所・調査報告会の会場の確保、中性紙封筒の用意や緊急の備品の調達、宿泊場所の案内、調査の広報などの援助や協力をいただいている。史料調査の場合、往々にしてこれをきっかけとして自治体史編纂を担う話がよくあるが、調査会としては、調査中には自治体史を請け負わないという原則を敷いている。ただし、調査中に地元市町村で抱えている問題、持ち込まれた史料保存に関する相談などは、依頼に応じてできる限りの手助けや処置を行っている。

そして何よりも当会が重要視しているのが、史料群を保存・管理する所蔵者との関係である。調査会では、事前調査から所蔵者と十分な打ち合わせをし、史料の保管の便を考えた整理方法に取り組んでいる。例えば、「史料保存日誌」に史料の状態を継続して記入していくとともに、史料内容やそこからわかる家や地域の歴史、さらに史料保存の重要性をできるだけわかりやすく伝えることによって所蔵者に史料への関心を引き起こし、地域で史料を所蔵していくことのすばらしさをともに共有していくようにしている。今後は、フィールド移転後も史料の保存や閲覧等の活用に関する相談を、定期的な所蔵者訪問などの機会を設けて、積極的に取り組んでいきたいと考えている。

## (2) 越佐歴史資料調査会の活動がもたらしたもの

それでは、越佐歴史資料調査会の活動は、地域にとってどのような影響や意味をもたらしたか、安塚町での3年間の活動に対する反応を中心に紹介していきたい。

まず、調査会参加者の動向である。参加者数は全体として微増傾向にあるが、地元参加者が周辺市町村に広がってきている。参加者の反応は「楽しい、和気藹々とした雰囲気の中で史料を読むことができる」ことが一番よいようで、それが調査会への継続的な参加と増加にも繋がっている。というのは、調査会の史料調査は、地元の参加者と世話人を始めとする歴史の専門家が一緒に膝を交えて整理を行っているので、地元の参加者にとっ

ては、より近しく深い歴史の知識を得ることができ、わからないことにすぐ答えてもらうことができる体制が整っていることが最大のメリットのようである。以外に気付かなかったことであるが、このようなところに調査会活動の意義があることもわかった。

こうした地元の人々は、古文書をもっと読めるようになりたい、もっと地元の歴史を知りたいという積極的な意図をもって調査会に参加してくるが、それが新たな活動を生み出しつつある。それが地元安塚町の古文書研究会の活動の活性化である。1998年度の調査報告会では、整理史料の中から、新潟県内では近世後期の全国的な事件であった頸城質地騒動に関連するものが発見され、その報告があった。上越（頸城郡）地方の人々にとって、この頸城質地騒動は、誰でも知っている身近なテーマであったため、その事件に関わる事象が安塚町にもあったということが大変な興味を呼び、古文書研究会で自発的にその史料を読んで調査を始めたというのである。当会の調査報告会が、地元の参加者の自発的な学習に繋がったということはたいへん喜ばしいことである。

次に、地元安塚町の文化財行政への影響である。調査会の活動は教育委員会を通じて、町の広報などを通じて周知されるようになってきた。例えば、調査報告会の開催は広報で伝えられている。調査報告会には、史料整理には参加していないが、古文書や地元の歴史に関心のある人々が多数発表を聴きにきているという状況がある。実際のところ、調査報告会における地元安塚町在住の参加者は20名以上を数え、報告会参加者全体の2/3余りを占めていたのである。

この結果、町の教育委員会には以下のような町民からのアプローチや反応が寄せられている。それは、自分の家にも古文書があることがわかり、その史料に何が書いてあるのか知りたいので史料を読んで欲しい、内容を教えて欲しいというようなこと。あるいは、自分の家から史料が出てきたが、（調査報告会を聴いて大切なものであることがわかったので）捨てるわけにはいかない、については町の教育委員会で預か

って欲しいというようなことである。町民の中に史料に対する関心が芽生えてきているようすが伺えよう。

また、調査会の活動が町議会で取り上げられている。ある議員が「町内にある貴重な古文書の散逸消滅が心配である。これらを保存し後世に引き継ぐことは我々の責任である。また、古文書から過去の歴史を学び、政策に生かすことも必要と思う。まず各家庭や集落にある古文書の保存が急務、町で収蔵施設を設けよ」という質問をしたところ、町当局は「越佐歴史資料調査会の活動と調査報告会の成果により、古文書に対する認識を深めることができ、保存は必要であると考えている（傍線筆者）。新しい政策に古文書を活用するためには、史料を読むこと、解説できる人材を育成することが必要である」という回答があった。

議会答弁を見てわかることは、調査会活動が行政の目に見える形となって現れたことにより、我々の活動が次第に理解され、その結果、歴史資料が大切なものと認識されたことである。このように、調査会の活動が町との連携の中で、史料整理の趣旨や史料を現地で保存することの大切さが理解され、周知されたことは大きな成果といえるであろう。

そして、所蔵者の反応である。所蔵者は調査中には必ず訪れて毎回史料整理の見学をされ、調査報告会にも参加している。自家の調査が終了した後も訪れて下さる所蔵者もいる。所蔵者は自家の史料が整理され、その内容が明らかになるにつれて、所蔵していた史料に対する関心が確実に高まっていくようである。ある所蔵者は「埋もれていた古文書を一点一点袋に入れて整理していただき、また調査のたびにいろいろと説明してもらって大変よくわかった。今後とも大切に保管していきたいと思っているが火災だけが心配である」というコメントを寄せている。

また、現在継続調査中の山岸家屏風下張り文書は、一旦調査が終了した後に、所蔵者から新たな史料情報の提供があり、それによって発見された史料である。そのため、当会はフィール

ド移転を1年余り延期することになり、下張り史料の解体・整理という新たな分野への挑戦が始まった。当会にとっては、活動の着実な足取りを確認できた嬉しい結果となったのである。

#### 4. おわりに—「現地主義」と越佐歴史資料調査会の課題

山本幸俊氏は今大会のテーマに寄せて、「現地主義」の実現のために「史料保存ネットワーク」という語彙の一般性に流されることなく、関係を取り結ぶ地域内の「核」となる主体を洗い出し、どのような人や団体・機関がポイントになる役割を果たし、地域住民と繋がることのできるのか、その主体をどう育て、どう結ぶのかを考えなくてはならないと問題提起された。

これを受けて越佐歴史資料調査会の活動を位置付けるならば、当会は決して地域内の「核」ではないが、地域における史料保存の主体となる「核」を育て、サポートする活動であるといえる。そして当会には、史料を持ち続けている所蔵者、そうした史料を地域全体で後世に伝えていこうとする地元自治体と地域住民、現地主義に基づいた史料保存活動を最終的にバックアップする県立文書館を結び付ける役割があるといえるのである。新潟においては、こうした連携によって「現地主義」の実践が展開されていることを確認しておきたい。

さて、「現地主義」と越佐歴史資料調査会の活動にも課題は多い。まず、フィールド移転の問題である。調査会がフィールドとする新潟県域は大きく、原則として「1フィールド2～3年」で県内各地域に移動するので、この期間で完了できる程度の史料群の規模が限界になってくる。つまり、たとえ良質で重要性の高い大きな史料群と遭遇しても、年間二～三回の調査と参加人数の現状では、手が付けられない状態である。一方、移転後の前フィールドとの関係も気に懸かるところである。史料保存や活用に関しての依頼には誠心誠意対応するが、調査会としてどこまで積極的に関わっていけるかは未知数である。

そして、最も気にかかる点は、整理した文書



は所蔵者の許で今後もいかに大切に保存されていくかということである。これは、湿気や虫害からいかに整理した文書が守られるかという保存技術的なことと同時に、文書群が何らかの形で散逸したり市場に流れないようにという保存意識の啓発の問題である。また所蔵者側には、史料が大切なものという意識が周知されても、今後自分の手で他に公開することへの不安と、公開によって発生するトラブルについての危惧があることがわかった。

これらの課題は我々だけではなく、全国各地

の史料整理に携わるものすべてが直面する共通の問題であると考え。すなわち、整理した史料と調査の過程で築いた人の絆は、整理が終了した後も、何らかのアフターケアが必要なのではないかということである。いかにして、一度築いた地域や所蔵者との関係をよりよく維持発展できるかこそ、史料は地域の共有財産という認識に立った保存・利用を育み、歴史遺産として後世に伝えることが可能になる重要なポイントであろう。こうした論点を含めて、議論を深めてもらえれば幸いである。